

19世紀英国のフェミニズム運動とオフィーリア —アンナ・ジェイムソン『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』を通して—

風 間 彩 香

Abstract

Anna Brownell Jameson's *Characteristics of Women, Moral, Poetical, and Historical* was the first book to examine Shakespeare's female characters at length and consider women as a legitimate category of Shakespeare criticism. Taking into account her figure as a feminist, this article explores the relationship between British feminism in the 1830s and Ophelia, the heroine of *Hamlet*. In her book, Shakespeare's female characters are classified into four categories depending on their characteristics. Ophelia is labeled as Characters of Passion and Imagination. "Passion" and "Imagination" were traditionally considered as the masculine characteristics in the Western philosophy and aesthetics. In the context of feminism, they were essential elements to succeed in love. Considering these contexts, these characteristics are weak especially in Ophelia because she is an extremely passive heroine. Her passiveness seems to contradict with feminism. However, Jameson accomplished her aim in the depictions of Ophelia's girlhood and a love relationship with Hamlet. It is typical for a feminist to put importance on these elements. Using a method typical for feminism, she developed her opinion through Ophelia. Overall, Ophelia's passiveness is a preferable subject for Jameson to maintain her opinion as a feminist.

キーワード……オフィーリア アンナ・ジェイムソン フェミニズム シェイクスピア作品における女性登場人物 19世紀

1. はじめに

19世紀の英国ヴィクトリア朝においては、従来シェイクスピア批評上で無視されてきたシェイクスピア作品の女性登場人物を復権する動きが見られた。シェイクスピア劇の女性たちの分析が勃興した背景には、女性執筆者の活躍があった。その端緒として名高いのが、作家兼女性解放論者のアンナ・ブラウネル・ジェイムソン(Anna Brownell Jameson 1794-1860)の『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』(*Characteristics of Women, Moral, Poetical, and Historical*, 1832)である。これは、シェイクスピア劇の女性に焦点を当てた初の体系的な分析であり、シェイクスピア研究において女性を正統な研究対象としてみなしたため、その後のシェイクスピア女性研究の道

筋を作った記念碑的な著作である。同時に、これはシェイクスピア女性研究の興隆が、メアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護—政治および道德問題の批判をこめて—』(*A Vindication of the Right of Women: With Strictures on Political and Moral Subjects*, 1792)を契機とした 19 世紀英国においてフェミニズム運動が開花した時期と重なっていたことを意味している。本稿では、フェミニストとしても積極的に活動したジェイムソンの著書を分析することで、シェイクスピア女性研究とフェミニズム運動の関係性を明らかにする。

特に本稿では、シェイクスピア劇の女性登場人物の中でも『ハムレット』のヒロインであるオフィーリアを取り上げる。オフィーリアはシェイクスピア劇の中でも特に消極的で受身の悲劇のヒロインとして一般に受容されている。女性の権利を主張するフェミニズム運動と、消極性の際立つオフィーリアは相いれないように思われる。しかし、エレイン・ショーウォーターが明察したように、オフィーリアの表象は時代の女と狂気に対する態度に左右される(Showalter 1985:92)。言い換えれば、オフィーリアは際立った消極性や受身性をもつからこそ、その時代に浸透した女性への見方が投影されやすい存在なのである。そのためジェイムソンが形成したオフィーリア像を分析することにより、彼女がいかに当時の社会における女性像を認識し、それにいかに立ち向かったかということが明確になる。

2. ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』について

2-1 その趣旨とシェイクスピア女性登場人物

ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』は、初版の翌年 1833 年には修正、増補が行われた上で再版され、ニューヨークでも 1837 年に出版され、1905 年までに 20 版を重ねた(Thompson and Roberts 1997:67)。ジェイムソンの著書が歓喜の声に迎えられたのは明白である。

では、ジェイムソンの著書は何を主眼としていたのであろうか。それは社会において女性が置かれた状況を糾弾することであった。

ジェイムソンの著書の序章においては、男性の意見を代表するメドンと、ジェイムソン自身を仮託していると考えられるアルダという二人の男女の議論を通して、著書執筆の目的や意図が述べられる。その主題と目的を問うメドンに対し、アルダは現行の教育制度を筆頭に、社会における女性の状況は間違っていること、そしてこの悪影響は男性にも及ぶことを訴える。女性が社会で十分に生かされていないために、男女双方に害が及ぶという考え方は後述するように、フェミニストとしてのジェイムソンの思想に根ざしている。このような状況の中、ジェイムソンは道徳や教育についての論評を書くという手段ではなく、シェイクスピア劇の女性登場人物という事例を提示し、それを通して読者に教訓を引き出してもらおうという手段を選んだのだ(Jameson 1971: 5)。

では、なぜジェイムソンはシェイクスピア劇の女性登場人物を選んだのだろうか。メドンも言及しているように、ジェイムソンは自身の経験や、歴史において語り継がれている女性をそ

の手段として用いることもできた。しかし、自身のすばらしさを得々と語ることによって女性の諷刺家にはなりたくはないし、すでに多くの偏見や先入観を刷り込まれている歴史上の女性を使いたくはない (Jameson 1971: 5; 11-12)。それに対して、シェイクスピア劇の女性登場人物においては歴史(history)と実人生(real life)とが結びついている(Jameson 1971: 13)。

ここで述べられている「歴史」と「実人生」とは何であろうか。アルダが語っているように、歴史は様々な権威によって私たちに受け継がれてきたものであるため、私たちはそれを偏見を持たずに判断することができない(Jameson 1971: 11)。つまり歴史とは、出来事や人生の客観的な記録ではなく、家父長的性質をもった世界によって形成されたイデオロギー的産物なのだ。そのため、歴史は女性を誤って伝え、沈黙の状態にするのに対し、戯曲は女性に声を与える虚構的構築物なのである(Slights 1993:390)。そして、戯曲の中でも特にシェイクスピア劇の登場人物は心と魂、判断力という完璧な人間性を備えている(Jameson 1971: 13)。同時に、彼らは実在する生身の人間ではないので、彼らの性格を白日の下に晒し分析するといった、実際の人間に対しては決してできないことができる(Jameson 1971: 14)。

つまり社会での女性の立場を糾弾したいジェイムソンにとって、完璧な人間らしさを備えながらも、その性質を分析することが可能なシェイクスピア劇の女性は最適な分析対象であった。

2-2 シェイクスピア女性登場人物と西欧哲学における価値体系

ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』は序章に加えて、「知性の人物(Character of Intellect)」、「パッション¹⁾と想像力の人物(Character of Passion and Imagination)」、「愛情の人物(Character of the Affections)」、「歴史的人物(Historical Characters)」の四章から構成されている。

序章では、シェイクスピア劇の女性を四つのグループに分けて論じたことに対してもメドゥンが問いかける。それに対しアルダは、シェイクスピア劇の登場人物を分類することは不可能とする主張はわかるが、何らかの分類が目的を達成するために必要であったと述べる(Jameson 1971: 22-23)。ジェイムソンの著書の目的は先述したように、社会における女性の現状を糾弾することである。つまり、四つのグループに分類した上でシェイクスピア女性を論じたことは、ジェイムソンのフェミニストとしての主張と密接に関係している。

なぜジェイムソンは上記の気質をもとにシェイクスピアの女性キャラクターを分類したのだろうか。そこからは現在に至るまで連綿と続く西欧の価値体系に立ち向かうフェミニストとしてのジェイムソンの姿が垣間見える。

アリストテレス以来の哲学においては、男女の認識能力と生得の気質はそれぞれ異なると考えられてきた。人間は理性を有する点において、その他の動物とは区別される。しかし男性は女性よりも高度な理性をもっている点において優れているのである。ここから理性や、それに付随する精神、正義、能動性、公的責任は男性的領域で、それと対照的な感情的、直感的な気質が女性の領域とされるのである(コースマイヤー 2009: 32-34)。

本稿の分析対象であるオフィーリアが含まれる「パッションと想像力」については後に論じるとして、ここではジェイムソンが施した「知性」と「愛情」の範疇が、西欧の伝統的な男性的、女性的という二項対立的な概念体系とどのような関わりをもつのかを明らかにしたい。

「知性」は伝統的な価値体系の上では男性的性質である。ジェイムソン自身、ポーシャを論じる章において、男性的ではない知性を想定できず、知性をもった女性を諷刺的にしか描くことのできない社会の風潮を批判する(Jameson 1971: 40)。ジェイムソンが考える女性の知性には共感能力(*sympathies*)と倫理観(*moral qualities*)が含まれる(Jameson 1971: 39)。彼女が最も知性的と考えるポーシャにおいても、才能や能力に加え、愛情や情熱が彼女の内にあることを強調する(Jameson 1971:54)。また日々の読書においてジェイムソンが共感もしくは嫌悪感を抱いた考えをまとめた『思考、記憶、空想についての備忘録』(*A Commonplace Book of Thoughts, Memories, and Fancies*, 1855)では、すばらしい知性をもつが共感能力が欠けているために視野が狭くなった男の例を通して、知性は共感能力の欠如により弱められることを説く(Jameson 1855: 11)。男女同権を主張したウルストンクラフトは、男女の美德も同一であることを述べ、英知が男性にのみ付随する美德ではないことを唱えた(ウルストンクラフト 1980:57)。しかしジェイムソンは女性の知性を主張しながらも、そこに共感能力という女性的な資質を見出す点で特徴的である。

それに対して、「愛情」は伝統的には女性の領域に位置づけられる。ジェイムソン自身もこれを女性的な特質と認識していたようだ(Jameson 1971: 31; Jameson 1855: 43)。しかし彼女にとって女性の愛情は、従来の慈愛に満ちた感情のみを表すのではない。序章においてアルダは「愛情の人物」の愛情に、高度な知性、思考能力、想像力、異常な気質、道徳的感受性(*moral sentiments*)が含まれているのかどうかを示したいと語る。そして彼女たちにおいては、共通して徳高く穏やかな愛情が支配的で、恥や恐怖、自尊心、憤り、虚栄心、嫉妬への勝利が見出されるのである(Jameson 1971: 33)。つまり女性的な資質である愛情を扱ってはいても、ジェイムソンにとっての愛情は画一的ではなく、多様である。

つまり、ジェイムソンは女性的であると認められた特質を放棄することなく、西欧の支配的価値観に異を唱えたのである。

2-3 ジェイムソンに見られる本質主義と反本質主義の共存

シェイクスピアの女性キャラクターをそれぞれの有した特質に応じて分類する手法は、ジェイムソンに特徴的である。ジェイムソンに続いて、シェイクスピア劇の女性の分析を行った作家兼シェイクスピア批評家のメアリ・カウデン・クラークの『シェイクスピアのヒロインたちの少女時代』(*The Girlhood of Shakespeare's Heroines*, 1851-2)や、女優ヘレナ・フォーシット・マーティンの『シェイクスピアの女性登場人物たちについて』(*On Some of Shakespeare's Female Characters* 1881-1891)と比べてもその違いは歴然としている。クラークの場合は、例えばポーシ

「ベルモントの女主人」、オフィーリアは「エルシノアのバラ」、デズデモーナは「マグニフィコの子供」というように、血縁や親子関係を前面にだしたタイトルが各シェイクスピアの女性登場人物を論じる前に付されている。マーティンの場合は、女優として自身が演じたシェイクスピア劇の女性キャラクターを取り上げており、彼女たちの名前がタイトルとして付されるのみである。もちろん両者ともにシェイクスピアの女性をその特質に応じて分類してはいない。それぞれのシェイクスピアの女性キャラクターを個別に見るクラークとマーティンに対し、似通った特質をもつシェイクスピアの女性登場人物をまとめ、その枠組みの中で論じるジェイムソンの手法は二人とは対照的である。

加えて、『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』という著書のタイトルにも注目したい。1900年にジョージ・ベル・アンド・サンズ・オブ・ロンドン社(George Bell & Sons of London)で出版される際、ジェイムソンの著書には『シェイクスピアのヒロインたち』(*Shakespeare's Heroines*)というタイトルが付された(Slights 1993:398)。しかし原本においては、シェイクスピアの女性キャラクターを論じているにも関わらず、シェイクスピアという名前が見られない。シェイクスピアの女性というよりも、女性全般を論じる姿勢が強調されている。

これらをふまえると、ジェイムソンは本質主義者であるという主張も理解できるだろう。シェイクスピアの女性登場人物の分類や、著書のタイトルからは、女性として備えるべき美德がまずあって、そこにシェイクスピア劇の女性を押しこめている印象を受ける。女性は女性らしい特徴を「本質的に」もっていると断定する、ジェイムソンにおいて頻繁に繰り返されるフレーズからもそれは明らかである(Jameson 1971: 9; 31)。

しかし、そうした本質主義とは反する考え方が見られるのもまた事実である。序章において、シェイクスピアの女性キャラクターは男性よりも劣るという一般に流布した概念をメドンが持ち出すと、アルダは力があるとか目立つという点では男性の優越を認めるが、自制的かどうかや情熱的かどうかといった気質の多寡によって、その登場人物の外面的な差異、つまり性別を強めたり、弱めたりすることがあると反論する(Jameson 1971: 15-16)。つまり、性別によってその性質を固定化することはできないということである。また、女性は政治には向いていないと豪語するメドンに対して、きちんと教育を受ければ女性も理性的な政治家になれるとアルダは反論する(Jameson 1971: 28-31)。つまり、理性を備えた男性的な領域としてみなされる政治にも、適切な教育を受ければ女性も十分関わるができるのだ。

ジェイムソンの著書にはこのように、本質主義に立脚した考え方と、それに真っ向から対立する見方双方が見られる。こうした対立する二つの考え方が同時に見られるのはなぜなのだろうか。これはフェミニストとしてのジェイムソンの立場に深く関わっている。

3. イギリスのフェミニズムにおける二つの流れ

ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』が出版された1830年代には、二つの主

要なフェミニズムの流派があった。当時、熱心な女性解放論者であったジェイムソンもこの影響を受けている。ここでは今井けいにならい、当時のイギリスで見られた「独自派」、「平等派」の二つのフェミニズムを見てみたい。

「独自派」フェミニズムは 18 世紀前半に生れた福音主義に端を発している。福音主義とは七年戦争(1756-63)で弱体化した信仰心を立て直すために、聖書の福音の真理にたちかえろうとする動きであった(今井 1992:13-14)。

福音主義と女性を結びつけたのが、ハナ・モア(Hannah More, 1745-1835)であった。彼女の『現代の女性教育に対する非難(*Strictures on the Modern System on the Female Education*, 1799)』において、男女の差は、創造主により設けられ、それぞれの美点をもっているため、モアはその差を抹消しようとするに懐疑的である (More 1995:21)。モアの主張は、男女平等を唱えたウルストンクラフトとは対照的である。男性と同等の権利を手にし、ともに働くよりも、女性には「家庭の天使」として聖書に基づく規律や道徳を家庭の中に確立することを求めたのである。

それに伴い、女性による知識の獲得は、彼女を虚栄心のない幸せな妻にする点で意義がある (More 1995:2-3)。そのために必要なのは、宗教に基づく教育であった。宗教教育により、女性が高められ、来世での永遠を約束されるのだ (More 1995:39)。

同時に、福音主義のもとでは慈善活動が推し進められた。これは女性に求められた家庭での諸徳を、社会にまで拡大した結果生じたものであった。慈善活動は大抵は無償で行われた。しかし、これを通して限定的ではあるが女性と社会との接点もたれた(今井 1992:19-20)。

「平等派」フェミニズムの主唱者として名高いウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』において、男女同権を高らかに宣言する。

なかでもそれを阻んできたものとして真っ先に彼女が非難するのが、教育制度である。これまでの教育制度では、女性は男性に愛されるための誤った女らしさを身につけることが求められた(ウルストンクラフト 1980:69)。しかしながら、「最も完全な教育とは、私の考えでは、肉体を強くし心を鍛えるのに最も適するように知性を働かせる訓練である」 (ウルストンクラフト 1980:49)。女性も「人類の一部として、自らを改革することを通じて世界を改革するように努力」しなければならない(ウルストンクラフト 1980:90)。なぜなら女性は体力的には男性に確実に劣るものの、美德や知識の面では同等、もしくは教育により同等のものを獲得しなければならないからである(ウルストンクラフト 1980:80)。彼女は、「人類がもっと有徳になり、そしてもちろん、もっと幸福になるために」男女共学の必要性さえ主張する(ウルストンクラフト 1980:324)。

このようにウルストンクラフトは誤った女性教育を糾弾するとともに、女性の参政権、財産権の要請、職業をもつことの推進という 19 世紀初頭としては極めて革新的な思想を展開した。

4. フェミニストとしてのジェイムソンの立場

それでは女性解放論者としてのジェイムソンの主張は、イギリスフェミニズムの流れの中でどのように位置づけられるだろうか。

細密画家デニス・ブラウネル・マーフィの長女として生まれたジェイムソンは、アイルランド出身の作家であり、旅行記や芸術関係の著書を多く残している。加えて、シェイクスピアの女性登場人物の研究書をも出版した彼女は、その文学的、芸術的教養のために、多くの若い女性たちが憧れる存在であった(ストレイチャー 2008:70-71)。

同時に、彼女は女性解放論者でもあった。1855年と1856年に彼女は、それぞれ「慈善姉妹」(*Sisters of Charity*)、「労働者共同体」(*The Communion of Labour*)と題して二つの講演を行った。さらに、女性の活用を訴えた1858年のジョン・ラッセル卿の主張を受けて、1859年には「ジョン・ラッセル卿への手紙」(*A Letter to Lord John Russell*)を書いている。これらに共通して見られる彼女の主張は、男女が協力することによって、よりよい社会が生まれるというものである。彼女は決して男女の間に全く差がないとは考えてはいない。男性的な特質や女性的な特質があるということは認めながらも、徳や悪行といった人間として本質的な部分においては違いがないことを主張する (Jameson 1859: 77)。その上で、全ての人間にとってよりよい社会が生まれるためには、男女が協力して働く必要性を強調するのだ (Jameson 1859: 148)。そのためには、女性の職業教育が必要なのである (Jameson 1859: xxx)。

男女が協力して働くことで、よい社会をつくることができるという点で、ジェイムソンの立場は「平等派」に立脚していると言えることができる。それに加えて、彼女はウルストンクラフトのように男女共学の必要性を訴える。なぜなら、今後社会で協調して働いていくために、幼少期のうちから互いを理解しておくことが必要だからである (Jameson 1859: 129)。

しかしながら、慈善運動家としてのジェイムソンの一面も見逃すことはできない。彼女は熱心な慈善運動家で、詩人バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)の妻として知られているアン・イザベラ・ノエル(Anne Isabella, Lady Noel Byron, 1792-1860)との親交があった。彼女とともに、ジェイムソンは建物を建て、様々なものを寄贈し、慈善的かつ教育的な計画の援助をした(ストレイチャー 2008:67)。さらに彼女は「労働者共同体」において、女性による無償の見返りを求めない仕事は、有償労働にもまして尊いものであると述べる (Jameson 1859: 136)。

したがってジェイムソンは慈善活動を行う中で社会的不平等を認識したとき、女性の無力さに不満を覚えた。その結果、彼女の主張は男女同権を求める「平等派」へ転じたと言える。

第二章第三節で指摘した、ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的特徴』における本質主義と反本質主義の共存も、平等派フェミニストであると同時に慈善活動家である彼女の立場に関係している。これに加えて勘案しなければならないのは、ジェイムソンが著書を出版した1830年代において、平等派フェミニズムの旗印であるウルストンクラフトの主張は革新的すぎて、彼女の名を口にすることすら憚られたということである。彼女の『女性の権利の擁護』が再び

注目を集めるのは 1870 年代末まで待たねばならなかった(今井 1992:54)。つまり、男女平等を高らかに主張するウルストンクラフトの平等派フェミニズムよりも、男女の違いを認め、女性が家庭において果たすべき徳を、慈善活動により社会にも広めることを説いたモアの独自派フェミニズムの方が当時の人々にとって受け入れやすかったのである。

したがって、ジェイムソンの著書のタイトルやその構成から見出される彼女の本質主義的立場は、不必要な批判を避けるためであった。確かにジェイムソンは似通った性質をもつシェイクスピアの女性キャラクターを同じグループに分けて論じているが、同じ枠組み内であってもジェイムソンは彼女たちを均質化するのではなく、それぞれの個性を見出している。

例えば、「知性の人物」に分類されている四人を見てみると、それぞれに特色のある異なった知性が想定されている(Jameson 1971: 41)。ジェイムソンが考える女性として備えるべき資質である知性を均一的に押し付けるのではなく、むしろそれぞれに異なる知性を見出している。さらに、その中でも彼女が最も理想的とするポーシャには、才能と権力だけでなく、情熱と愛情が見出せることをジェイムソンは力説している(Jameson 1971: 23; 54)。つまり、知性とは男性的領域にとどまるものではなく、女性的特質をも包含する幅広い資質でありうるのだ。

したがって、ジェシカ・スライツが主張するように、ジェイムソンがその著書で見せる一見すると本質主義的な姿勢の背後には、女性らしさという概念の幅広さが隠されている(Slights 1993:391)。つまり、ジェイムソンは社会で女性が置かれた状況を糾弾するという目的を達成するために、より多くの人に受け入れられる本質主義という隠れ蓑を使って、社会に浸透している女性らしさには幅があることを主張したのである。

5. 「パッションと想像力の人物」について

次に、本稿の分析対象であるオフィーリアが分類されている「パッションと想像力の人物」の枠組みについてより詳しく見ていきたい。この類型には、『ロミオとジュリエット』のジュリエット、『終わりよければすべてよし』のヘレナ、『冬物語』のパーディタ、『十二夜』のヴァイオラ、『ハムレット』のオフィーリア、そして『テンペスト』のミランダの六人が含まれる。

ここでも前章で述べたように、パッションと想像力という同じ性質を有してはいても、それぞれのシェイクスピアの女性キャラクターがもつ資質がさらに細分化される。ここでは特に本稿の分析対象であるオフィーリアを中心に見ていきたい。

オフィーリアはミランダと同じ括りの中で論じられている。二人においては、全ての知性と倫理観があったとしても潜在的にしか認められない。愛は無意識の衝動であり、想像力は彼女たちに内面の力ではなく、外面の魅力を与えている。彼女たちにおいては、女性的な性質は慎み、優雅さ、優しさといった初歩的なものにとどまっている(Jameson 1971: 153-154)。つまり、他の四人と比較するとオフィーリアとミランダは自身の情熱的な愛情を認識しておらず、ジュリエットとヘレナにおいて見られる想像力が自身の内面を強化するのではなく外面に向けてし

まっており、ヴァイオラとパーディタに見られる思考力や倫理観といった内面の強さが顕在化していない。したがって他の四人と比べると、より受動性が際立っていると言えるだろう。

5-1 美学における「パッション」と「想像力」

西欧の価値体系において、「情熱」と「想像力」はどのように認識されていたのだろうか。

第二章第二節では、西欧哲学において男性的、女性的という二項対立の概念が前提にあったと述べた。哲学から派生し、美的快を扱う「美学(aesthetics)」という研究分野が生まれた(コースマイヤー 2009:70)。美学では、美に対する快が生じるきっかけとなる根本原因が探求された。

政治家兼哲学者のエドモンド・バーク(Edmund Burke, 1729-1797)は『崇高と美の観念の起源』(*A Philosophical Enquiry into the Origin of our Idea of Sublime and Beautiful*, 1757)において、情念(passion)やそれに伴う快や苦痛という美的快をもたらすのは、滑らかで柔らかな女性の身体の美しさであることを述べた(バーク 1999:124-125)。それに対して、イマヌエル・カント(Immanuel Kant, 1724-1804)に代表されるように、多くの理論においては美的快の起源を性的な快の中に見出すことは避けられた(コースマイヤー 2009:80-84)。

しかし美の分析においてジェンダーを無視することはできない。なぜなら優れた精神能力をもつ男性が暗黙のうちに理想的な美の判定者とされたからだ(コースマイヤー 2009:85-86)。バークにおいて“passion”に「情念」という訳語が当てられていたように、男性が美の対象としての女性に欲望することで美的快が生まれるという暗黙の前提があった。

想像力も芸術においては男性的な領域とされた。芸術的想像力についての考察は19世紀ヨーロッパで盛んになり、すばらしい芸術を生み出すためには男性の反社会的で反道徳的な行為も許容された。これに対して女性の狂気は「ヒステリー」とされ、男性に許容された芸術的狂気のように肯定的にはとらえられなかった(コースマイヤー 2009:59-60)。

つまり、西欧の美学において情念や想像力は男性的領域に属するものであった。

しかしジェイムソンはこれに異を唱える。『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』の序章では、女性の教育においてパッションや感情が軽視されることを批判する。そして感受性(sentiment)を嘲笑し、ジュリエットやイモーゼンを馬鹿にする少女たちを生じさせた異常な社会を告発するのである(Jameson 1971: 28)。

ジェイムソンの主張は、ウルストンクラフトの流れの中に位置づけられる。彼女も同様に、男性が優れた判断力を有するのは彼らが自由にその情欲(passion)を発散しているためとし、女性にも情欲を規制すべきではないと主張する(ウルストンクラフト 1980:211)。この議論は、子どもを保護するという名目で、世間に関する知識を事前に教え込むことにより、子どもに自由な行動をさせてはいけないとした従来の風潮に対する批判の中でなされる。この知識は、人間が世俗の不幸に陥ることを防ぐかもしれないが、美德や知識が卓越したものになることを妨げる(ウルストンクラフト 1980:206)。つまり、たとえ情欲の向かう先が誤っていたとしても、

それを自由に発散させることは人間の能力を発展させるために必要なのだ。男性が女性よりも優れた能力をもつとされるのは、男性において情欲の発露が規制されなかったためである。つまり、ここでウルストンクラフトが意味する情欲とは、それが正しい正しくないに関わらず、自身を突き動かす衝動であり、それは人間の内に高次の能力を育むのだ。

ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』が女性にも情欲を要求するのは、これがパークの『フランス革命の省察』(*Reflections on the Revolution in France, 1790*)に反論する目的で書かれたことと関係している。パークはここで、伝統や慣習、相続、世襲制度を破壊するフランス革命を批判する。彼が重視するのは、慣行に基づく権利(prescription)であり、これは長年蓄積されてきた自然の法であり、これを覆すことはできない(Burke 1905: 91; 126-127)。ウルストンクラフトはこれに反論するために『人間の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Men, 1790*)を著し、機会の均等を主張し、その後『女性の権利の擁護』でそれを女性にも求めた。『女性の権利の擁護』において彼女は、長らく受け継がれてきたからという理由で慣習を重視するパークを非難する(ウルストンクラフト 1980:217)。慣習とは行いによって培われ、その行動はもちろん男性のものである。ウルストンクラフトは慣習を長年続いてきたからという理由で重要視することには反対するが、高次の能力を養うため、男性と同様に女性にも経験が必要であることを説く。そのためには行動へと突き動かす情欲が女性にも必要なのだ。

パークの『崇高と美の観念の起源』における情念と、ウルストンクラフトの意味する情欲とは、それらが何に結実するかという点が異なる。前者において情念は美のもととなる美的快を生み出し、後者において情欲は男性に典型的な高次の能力につながる。しかし、どちらも男性に特与とされてきた高度な資質や能力に結びつく。ウルストンクラフトはこれが男性のみに占有されるべきでないことを主張し、ジェイムソンもこれに倣うのである。

ジェイムソンはパッションと想像力が際立つジュリエットについて、愛するロミオへの迸り出る愛情を吐露し、その想像力ゆえに詩的なイメージに満ちた言葉を発するとしている(Jameson 1971: 116)。そしてジュリエットは、たとえそれが誤った行動だとしても、ロミオへの愛を完遂するために死をも厭わない。つまりジェイムソンにとって、パッションと想像力は女性にも見られ、そして男性と同様に必要な資質なのである。

5-2 恋愛における「パッション」と「想像力」

フェミニズムにおける恋愛の言説においては、「パッション」と「想像力」は別の意味をもつ。

ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』において、第五章第一節で述べたように情欲は女性が男性と同様、高次の能力を手にするために必要な素養であったが、情熱(passion)は男女の恋愛に関わる。

恋愛につきものの情熱においては「チャンスと興奮が選択と理性の代りに登場」し、「ある程度は、多くの人を感じるころのものである」。そして「恋愛の情熱は、不安と困難によってお

のずと燃え上っていき、心を日常の状態から引き離し、感情を高ぶらせる」。対照的に、「熱病のような恋愛を鎮める結婚という安定した状態は、健康な温度を保っており、盲目的な讚美や猫可愛がりのような官能的な感情を友情—確信に満ちた尊敬—という冷静な優しさに代える」(ウルストンクラフト 1980:62-63)。つまり燃え上がるような恋愛の情熱は、結婚を経ることで、穏やかでありながら同時に相手への尊敬に満ちた友情へと変わるのが自然な流れなのである。

では「想像力」はどのように機能するのだろうか。「想像力は、恋愛を天界の魅力をもって描きえるし、素晴らしい理想の相手を空想させ、その人に対して夢中にならせることもできる。」しかし同時に「この想像力は、魂を高尙にするような、そしてまた、“天国への階段”としてその愛情が役に立った後までも続くような深い相互の愛情を想像させることができるのだ」(ウルストンクラフト 1980:140)。つまり、想像力は恋愛においては相手を美化することで情熱を煽ることができ、同時にそれは高尙な深い相互の愛情へと続いているのである。

5-3 「パッションと想像力の人物」としてのオフィーリア

これをふまえると、美学と恋愛双方における「パッション」と「想像力」の価値体系において、オフィーリアはその資質が最も顕在化していない女性キャラクターである。

オフィーリアは口数が少なく、狂気に陥って初めてハムレットへの愛を表明する(Jameson 1971: 157; 168)。しかしそのときにはすでに彼女の理性は崩壊しているのである(Jameson 1971: 168)。つまりジェイムソンは、美学において重視された芸術に結実するようなパッションや想像力をオフィーリアに見出していない。

そしてオフィーリアは情熱と想像力の力を借りて恋愛を实らせることもない。オフィーリア以外の五人は何らかの形で、その情熱を完遂している。ヘレナとヴァイオラ、パーディタ、ミランダは、最終的に彼女たちの情熱は実り、思いを寄せる相手と結ばれる。それに対し、ジュリエットとオフィーリアは死を迎えるのである。ジュリエットの死の場合、彼女とロミオの愛は死によって実ったという見方をジェイムソンはとっている(Jameson 1971: 122)。そのため、二人が死を迎えたからといって彼らの情熱が完遂されなかったとは言えない。しかしながら、オフィーリアは死を迎えるばかりか、後述するように恋人ハムレットは自身の重責に耐えられず、彼女への愛をとるに足りないものと位置付ける(Jameson 1971: 167)。彼女は運命に押し流された罪なき犠牲者なのである(Jameson 1971: 170)。

したがって、オフィーリアは「パッションと想像力の人物」に分類されてはいるが、最もその資質の弱い人物である。

6. ジェイムソンによって造形されたオフィーリア

6-1 オフィーリアの性格造形

「パッションと想像力の人物」の範疇の中でも、極めてその資質の弱いオフィーリアをジェ

イムソンはどのように扱っているだろうか。

ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』において、オフィーリアの容姿や性格については、若くて美しく、純粋でかよわい乙女であるという見方が見られる。

Ophelia—poor Ophelia! Oh, far too soft, too good, too fair, to be cast among the briars of this working-day world, and fall and bleed upon the thorns of life! What shall be said of her? for eloquence is mute before her! Like a strain of sad, sweet music, which comes floating by us on the wings of night and silence, and which we rather feel than hear—like the exhalation of the violet, dying even upon the sense it charms—like the snow-flake dissolved in air before it has caught a stain of earth—like the light surf severed from the billow, which a breath disperses; — such is a character of Ophelia: so exquisitely delicate, it seems as if a touch would profane it; so sanctified in our thoughts by the last and worst of human woes, that we scarcely dare to consider it too deeply. (Jameson 1971: 154-155)

オフィーリアに美しさや純粋さ、かよわさを読み取るのは、ジェイムソンに限ったことではない。ジェイムソンとほぼ同時代に活躍したイギリスの批評家ウィリアム・ハズリット(William Hazlitt, 1778-1830)は『シェイクスピア劇の登場人物たち』(*Characters of Shakespeare's Plays*, 1817)において、オフィーリアが儚く彼女の死が悲哀に満ちていることを感嘆を込めて語っている。したがって、ジェイムソンが述べる美しく純粋でかよわいオフィーリア像はこの流れを引き継ぐものであると言える。

ここで、ジェイムソンによるシェイクスピア作品における女性登場人物の分析をシェイクスピア批評全体の中で位置づけてみたい。ジェイムソンの分析は、ドイツの文豪ゲーテ(J. W. Goethe, 1749-1832) から始まるロマン派批評の流れのもとに位置づけられる。ゲーテは小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(*Wilhelm Meister's Apprenticeship*, 1796)で、優柔不断なハムレット像を確立した。

ゲーテの見解をさらに理論化したのが、イギリスの詩人兼批評家コールリッジ(S. T. Coleridge, 1772-1834)の『シェイクスピアと同時代の詩人、劇作家についての講義』(*Notes and Lectures upon Shakespeare and Some of the Old Poets and Dramatists*, 1808)である。コールリッジによると、ハムレットを理解するためには、私たち自身の精神構造について考えることが必要である(Coleridge 1849:207)。ハムレットは疑いなく勇敢で死などものともしないが、考えたことを先延ばしにし、行動する力を失ってしまうのである(Coleridge 1849:208)。

ハムレットの精神構造に傾注するこうした分析の流れの中に、ハズリットや、ドイツの文学者兼評論家のシュレーゲル(August Wilhelm Schlegel, 1767-1845)を位置づけることができる(Bevington 2011:116-117)。

そして18世紀後半から、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』や、モーリス・モーガン(Maurice Morgan, 1726-1802)の『サー・ジョン・フォルスタッフの演劇的性格』(*An Essay on the Dramatic Character of Sir John Falstaff*, 1777)を筆頭とした性格分析の台頭により、シェイクスピア劇の女性にも注目が置かれ始めるのは当然の流れであった。

先述したように、美しさやかよわさを強調するジェイムソンによるオフィーリア像は従来の批評に与するものであった。ポーシャの分析においては、ジェイムソンは彼女の知性を正当に評価しないハズリットやシュレーゲルに反論する(Jameson 1971: 41-42)。しかしながら、オフィーリアの場合は、むしろ同調している(Jameson 1971: 155)。

だが一方で、その描写には明確な差異が見られる。それは比喩を多用することである。

先の引用においても、オフィーリアの美しさや繊細さが、スマレの花や雪片に例えられ、そのようにあまりにも儂いために、日々の生活で目の前に立ちはだかる困難を乗り越えることができなかったことが述べられている。彼女の儂さを強調する描写はその後も続き、かつて著者自身が見た、嵐の中を風に翻弄されながら力なく飛ぶ若い鳩に、運命に翻弄されるオフィーリアを重ねあわせている(Jameson 1971: 157)。最終的にジェイムソンは、ギリシア悲劇の憐れな犠牲者イピゲネイアにオフィーリアを重ねあわせる(Jameson 1971: 169-170)。

ジェイムソンに見られる比喩の多用は、他の批評には見いだせない。もちろんコールリッジやハズリットはハムレットを主に分析しているため、彼らに比喩が見出せないのは分析対象の違いのためであるとも考えられる。しかしジェイムソンはハムレットにも比喩を用いるのだ(Jameson 1971: 167)。

なぜ比喩が多用されるのだろうか。それは第四章で述べたように、自身の主張を女性らしさで隠す必要があったためである。ジェイムソンの目的は、社会における女性の現状を糾弾することである。つまり社会批判が目的であった。しかし、著書が出版された当時において、激的な社会批判を展開することは不必要な批判を招く恐れがある。そのために、オフィーリアの儂さを花や雪片のような女性らしさを押し出した比喩で描写し、またギリシア悲劇を持ち出し自身の教養を誇示することで、社会批判に伴う激烈さを包み隠す必要があった。これらの手法は、フェミニストでありながら文学や芸術に関する教養を誇るジェイムソンに最適であった。オフィーリアのかよわさの主張においては、まだ明確な社会批判は顕在化していないが、この後に続く男女の不平等の糾弾に向けて、その激烈さを緩和する目的があったと考えられるのだ。

6-2 オフィーリアの幼年時代

オフィーリアの性格造形と深く結びついているのが、彼女の幼年時代の描写である。

ジェイムソンによると、オフィーリアは幼少時に宮廷に連れてこられ、王妃ガートルードの侍女となった(Jameson 1971: 156)。これは、ジェイムソンが女性解放論者であることを考えると納得のいく設定である。よりよい社会を築くために、男女が協力して働く必要を訴えたジェ

イムソンにとって、女性が社会で働くために家をでるのは好ましいことであった。『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』の序章においても、結婚するまで女性たちを修道院に閉じ込め、結婚してからも社会について無知な状態でいさせるのはよくないと、現行の社会慣習を糾弾する (Jameson 1971: 28)。家や修道院のような社会から隔絶された閉鎖的な空間に女性を閉じ込めておくことは、女性解放の点においては望ましくないとされたのである。したがって、ジェイムソンが自ら想定したオフィーリアの幼年時代は、女性解放論の点から見ると好ましい。

しかし見逃してはいけないのは、その後続く記述である。ガートルードの侍女としてのオフィーリアを想定した後で、一人娘を幼いうちから手放した父ポローニウスに対して懐疑を示す (Jameson 1971: 156)。しかし、これについては 19 世紀英国における中産家庭の一般的な感覚を考え合わせると納得がいく。なぜなら、ヴィクトリア朝において少女の教育に重要な役割を果たしたのは母親だったからである。少女たちは母親から専ら家庭において、女性として必要な資質を教え込まれた。社会に出ることなく家にとどまる妻と娘を養い、彼らの経済的依存と遊惰な生活様式を可能にすることで、稼ぎ手である男性は自身の社会的地位と経済力を世間に誇示することができた (河村 2001:240-243)。エルシノア宮殿の大臣であるポローニウスが一人娘を宮殿へ奉公にだしたとなれば、当時の感覚においては異常な事態である。

しかしここで大臣の一人娘であるオフィーリアが属する貴族階級における状況も考え合わせる必要がある。19 世紀において、貴族の若い娘たちは、宮中で女王陛下に拝謁すれば、上流の社交界と結婚市場への参入を認められたことになった (ヒューズ 2005:245-246)。これを考え合わせると、幼いうちから王妃ガートルードの侍女となったオフィーリアは異常な生育環境に置かれていたわけではなく、むしろ上流階級の女性として大出世を果たしたことになる。

それにもかかわらず、ジェイムソンが幼いオフィーリアを侍女にだしたポローニウスに対して疑念を表明するのはなぜか。それはジェイムソンが中産階級を含めたより多くの女性に訴えかけることを意図していたからであると考えられる。19 世紀初頭のイギリスの社会構成を見ても、中産階級が人口の約 2 割を占めるのに対して、上流階級は人口の 2% に満たない (長島 1987:95)。そして 18 世紀半ばから 19 世紀にかけておこった産業革命により、中産階級家庭の社会的地位が上昇した (長島 1987:93-94)。また識字率も徐々に上昇していた。産業革命期には下層中流階級以下の教育水準は極めて低く、識字率も低かったが、19 世紀初頭には 58% にまで向上していた (長島 1987:69;138)。

つまり、より多くの女性に訴えかけたいジェイムソンにとって、社会における少数派の上流階級の価値観よりも、読み書き能力を身につけ、かつ上流階級よりその数の多い中産階級の感覚を重視する必要があった。それに従い、ポローニウスの感覚の異常さや、オフィーリアの異常な生育環境が強調された。彼女の良好とは言えない幼少期の生育環境は、その後彼女が辿る悲劇的な運命に自然と結びつく。

幼少期の描写はオフィーリアだけにとどまらない。他のシェイクスピア女性においてもその

幼少期が詳述され、それが彼女たちのとる行動や性格と結び付けられている。例えば、ポーシャの何不自由のない裕福な生育環境は、彼女の辛辣さや苦々しさのない知性の形成につながっている(Jameson 1971: 44)。

こうした幼少期の描写は、コールリッジやハズリットには決して見られない。もちろん分析対象の違いが大きく関係しているだろうことは想像がつく。主人公としてのハムレットは、様々な危機的状況が描かれ、彼の内面もそれにより大きく揺さぶられる。幼少期を考慮に入れなくても、彼を押し量るためのヒントはすでに原作テキスト中に散りばめられているのだ。しかしながら、オフィーリアにはなぜ彼女が悲劇的な運命に絡めとられてしまったかについて推量するための材料はほとんど見られない。

しかし同時に考慮に入れなければならないのは、フェミニストとしてのジェイムソンの立場である。第二章で見たように、モアもウルストンクラフトも女性の状況を改善するために教育制度改革を訴えていた。なぜなら教育はその後の女性の生き方に深く関わるからである。ジェイムソン自身も「労働者共同体」において男女共学を主張するが、それは将来男女が協力して働くための下地を幼いうちから築いておくべきという立場からであった(Jameson 1859: 129)。

つまり、ジェイムソンがシェイクスピア作品の女性キャラクターの幼少期を詳述するのには理由があった。それは幼少期の経験がその後の人生に影響するというフェミニスト的見解のためである。オフィーリアにおいて異常な生育環境が描かれたのは、その後の彼女の悲劇的な運命を暗示すると同時に、幼少期の異常な環境がその後の悲劇につながりうるというフェミニストとしての警告でもあったと言えるのである。

6-3 オフィーリアがハムレットへ抱く愛情

ジェイムソンの『道徳的、詩的、歴史的女性の特徵』において特徴的なのは、恋愛の描写に多くが割かれることである。例えば、「知性の人物」のポーシャにおいては、彼女が自身の知性を発揮する最大の見せ場である裁判の場面に劣らず、彼女が思いを寄せるバッサーニオとのやりとりに多くが費やされている (Jameson 1971:49-56)。

オフィーリアについても例外ではなく、彼女とハムレットがいかに愛し合っていたかという議論に最も重点が置かれている。特にオフィーリアにおいて注目すべきは、二人の愛情関係に男女の不平等を見出す点である。ジェイムソンは、従来オフィーリアへの愛情を公言するハムレットの彼女に対する愛情が疑われるにもかかわらず、特にハムレットへの愛を表明しないオフィーリアの彼への愛情が当然視されてきたことに異議を唱えるのだ(Jameson 1971: 161)。そして二人の間に確かに互いへの深い愛が存在していたことについて、大部を割いて証明するのである(Jameson 1971: 161-166)。しかしながら、ハムレットは自身に課された重圧に耐えられず、彼女への愛をとるに足りないものと位置付けたのである(Jameson 1971: 166-167)。

ハムレットが自身の責務の重さのためにオフィーリアへの愛を軽視せざるを得なかったとい

う主張は、ハズリットやシュレーゲルにも見られる(Hazlitt 1926:84-85; Schlegel 1846:405)。しかしながら、オフィーリアの愛を主張するのはジェイムソンに特徴的である。

そして注目すべきなのは、その裏付けである。まず、オフィーリアの愛を証明する部分を見てみたい。ここでは他のシェイクスピア作品の女性キャラクターを持ち出し、オフィーリアだけがハムレットを愛することができる資質をもっていることが証明される。

Let us for a moment imagine any one of Shakespeare's most beautiful and striking female characters in immediate connexion with Hamlet. The gentle Desdemona would never have despatched her household cares in haste, to listen to his philosophical speculations, his dark conflicts with his own spirit. Such a woman as Portia would have studied him; Juliet would have pitied him; Rosalind would have turned him over with a smile to the melancholy Jaques; Beatrice would have laughed at him outright; Isabel would have reasoned with him; Miranda could but have wondered at him: but Ophelia loves him. (Jameson 1971: 161)

他の登場人物と比較して自身の主張を証明する手法は、コールリッジにも見られる。ハムレットの独白が、彼以外の誰に言えるかということを証明するために、『お気に召すまま』のジェイクイーズ、『オセロー』のイアゴーを用いている(Coleridge 1849:229)。しかしそれは表面的なものにとどまり、ジェイムソンほど登場人物の性格把握の深さや、多様性は見られない。

では次に、ジェイムソンはハムレットの愛情の裏付けをどのようにとっているだろうか。今度は聖書を引き合いに出す。聖書では神の象徴が鳩とされていることから、人々は純粋で無垢なものに敬意を払うよう教えられてきたという。そのためハムレットが純粋なオフィーリアを愛するのは当然としているのだ(Jameson 1971: 165-166)。

この奇妙に宗教的な裏付けを行ったのはなぜなのか。ジェイムソンの『思考、記憶、空想についての備忘録』は日々の読書において自身が感銘を受けた考えを紹介すると同時に、きわめて宗教色が強く、キリスト教徒としての徳を説いている。慈善活動に従事していたことから、彼女が福音主義に無知であったとは考えられない。そのためハムレットの愛を裏付ける宗教的な記述は、彼女の福音主義的思考が現れていると言える。また、男性ハムレットの女性オフィーリアへの愛を証明するというフェミニスト色の強い主張を、福音主義で隠そうとする狙いもあったのかもしれない。

では、なぜこれほどまでにジェイムソンは愛情を強調するのか。これもフェミニストとしてのジェイムソンを考えれば納得がいくだろう。モアもウルストンクラフトも教育、社会改革を訴えたからと言って、女性の愛情を軽視したわけではなかった。モアは家庭での愛情深い女性の役割を重視しているし、ウルストンクラフトも妻として、母としての女性の愛情が重要であることを説く(More 1995:2; ウルストンクラフト 1980:358)。ジェイムソン自身も、一般

的に愛情が女性の中で支配的な要素であることを表明している(Jameson 1971: 31)。

したがって、ジェイムソンはフェミニストとして愛情の問題を避けて通ることはできなかった。特にオフィーリアの分析においては、ハムレットを愛する資質こそオフィーリアが個性を発揮できる場であり、同時にフェミニストとしてのジェイムソンが男女の不平等を糾弾できる場であったのだ。

7. おわりに

ジェイムソンによるシェイクスピアの女性キャラクター分析である『道徳的、詩的、歴史的な女性の特徴』には、フェミニストとしての彼女の主張が深く関わっていた。彼女の著書に見られる本質主義は、その主張があまりにも急進的とみなされないようにするための防壁であったと言える。

ジェイムソンにおいて、オフィーリアは従来通りそのかよわさが強調され、受身で自発性のない女性として認識されている。ジェイムソンはオフィーリアを自身のフェミニズムを主張する上でどのように用いたのだろうか。それは、彼女の幼年時代の描写と、ハムレットとの愛を通して展開された。オフィーリアの異常な生育環境がその後の彼女の悲劇へとつながることを示すことで、幼少期がいかに女性に多大な影響を及ぼすかという点に警鐘を鳴らした。他のシェイクスピア作品の女性キャラクターに比してオフィーリアだけがハムレットを愛する素質があること、聖書を持ち出してハムレットの彼女への愛を証明することで、彼女だけがもつ資質を見出し、男女の不平等をも糾弾したのである。つまり、ジェイムソンにとってオフィーリアはかよわい存在であるからこそ、フェミニストとして避けて通ることのできない幼年時代と愛という視点から、フェミニズムの主張を展開しやすい人物であったのである。

<注>

1) “passion”は文脈によって多様な意味内容をもつ語なので、ここでは広く「パッション」とする。ただし訳出されている場合は、その表記に従う。

<引用文献>

- Bevington, David (2001), *Murder Most Foul: Hamlet Through the Ages*, Oxford: Oxford University Press.
- Burke, Edmund (1905), *Reflections on the French Revolution*, 1790, London: Methuen.
- Clarke, Mary Cowden (1974), *The Girlhood of Shakespeare's Heroines, 1851-2*, New York: AMS Press.
- Coleridge, Samuel Taylor (1849), *Notes and Lectures upon Shakespeare and Some of the Old Poets and Dramatists with Other Literary Remains of S. T. Coleridge*, London: William Pickering.
- Goethe, Johann Wolfgang von (1839), *Wilhelm Meister's Apprenticeship*, 1796, New York: John, W. Lovell Company.

- Hazlitt, William (1926), *Characters of Shakespeare's Plays*, London: J. M. Dent and Sons Ltd.
- Jameson, Anna (1971), *Characteristics of Women, Moral, Poetical, Historical*, 1832, New York: AMS Press.
- (1855), *A Commonplace Book of Thoughts, Memories and Fancies*, London: Longman.
- (1859), *Sisters of Charity and The Communion of Labour: Two Lectures on the Social Employments of Women*, London: Longman.
- Martin, Helena Faucit (1970), *On Some of Shakespeare's Female Characters*, 1881-91, New York: AMS Press.
- More, Hannah (1995), *Strictures on the Modern System of Female Education*, 1799, Ed. Jeffrey Stern, Vol. II, Bristol : Thoemmes.
- Morgann, Maurice (1963), "An Essay on the Dramatic Character of Sir John Falstaff", 1777, *Eighteenth Century Essays on Shakespeare*, Ed. D. Nichol Smith, Oxford: Clarendon Press.
- Schlegel, August Wilhelm von (1846), *A Course of Lectures on Dramatic Art and Literature*, London: H. G. Bohn.
- Showalter, Elaine (1985), "Representing Ophelia: women, madness, and the responsibilities of feminist criticism", *Shakespeare and the Question of Theory*, Ed. Patricia Parker and Geoffrey Hartman, New York and London: Methuen.
- Slights, Jessica (1993), "Historical Shakespeare: Anna Jameson and Womanliness", *English Studies in Canada*, 19: 387-400.
- Thompson, Ann and Sasha Roberts (1997), *Women Reading Shakespeare 1660-1900: An Anthology of Criticism*, Manchester and New York: Manchester University Press.
- Wollstonecraft, Mary (1989), *A Vindication of the Rights of Men; A Vindication of the Rights of Women; Hints*, 1790, London: W. Pickering.
- 今井けい(1992)『イギリス女性運動史—フェミニズムと女性労働運動の結合—』日本経済評論社.
- ウルストンクラフト, メアリ(1980)『女性の権利の擁護: 政治および道德問題の批判をこめて』白井堯子訳, 未来社.
- 河村貞枝(2001)『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店.
- コースマイヤー, キャロリン(2009)『美学—ジェンダーの視点から—』石田美紀ほか訳, 三元社.
- ストレイチー, レイ(2008)『イギリス女性運動史: 1792-1928』みすず書房.
- 長島伸一(1987)『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局.
- バーク, エドモンド(1999)『崇高と美の観念の起源』中野好之訳, みすず書房.
- ヒューズ, クリステイン(2005)『十九世紀イギリスの日常生活』植松靖夫訳, 松柏社.

主指導教員 (石田美紀准教授)、副指導教員 (辻照彦教授・市橋孝道准教授)